

令和6年度入学 社会福祉学部 一般選抜・後期 試験問題の出典

| 種別  | 大問<br>番号 | 著者名   | 著作物名                   | 書名等                    | 版元  |
|-----|----------|-------|------------------------|------------------------|-----|
| 小論文 | 一        | 舘岡 康雄 | 利他性の経済学<br>支援が必然となる時代へ | 2006年 P84-87より<br>一部改変 | 新曜社 |

令和 6 年度 一般選抜・後期

社会福祉学部

## 小 論 文 (90 分)

### 注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、2 ページあります。なお、下書き用紙が 2 枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 200 点)

支援は、被支援者の行なっている動的な活動を支援者も動きながらそのプロセスを高める活動である。したがって、現在の支援が将来において自助努力を奪うことにならないかどうか、今支援したほうがよいか、それとももう少し時間をおいてすべきなのか等、判断が難しい。概念的には可能でも、実践の段階では、支援になっているかいないか判断ができない状況に追い込まれる。そこで、活動や関係が刻々変わる中で、これが支援であってこれは支援ではないということを瞬時に判断できる支援定義を構築する必要がある。

管理と違って支援の場合には、支援者がいかに支援したくとも相手が望まないときには成立しないし、逆に被支援者がいかに支援を望んでも、支援者が支援しなければ、支援はない。また支援は、管理のように計画と実行の差を、静的なアウトプットとして定量化できない。動的な活動のプロセスの中で、支援されるものと支援するものの行為が重なって支援が刻々と創造されるのである。

たとえば、お年寄りがパソコンで文字を打ち込もうと思って困っている例を取り上げて考えてみよう。マニュアルなどを自分で見るなどやる気のある場合には、いたずらに口出しをしないで見守るのが支援であり、そのような意欲が乏しい場合には、まずは楽しさを分かってもらって、次の意欲につながるのが支援となる。つまり、決まった目標ややり方があるのではなく、支援は被支援者と一緒に刻々と創造されていく。被支援者にやる気が起こってきているのに介入すれば、おせっかいと感じられてしまう。だから、刻々と変わる状況においても、自分の行為が支援行為になっているかどうかを瞬時に判断できる定義が必要なのである。

管理と支援の本質的な違いから、そのような定義の構築を試みる。

表をごらんいただきたい。この表は表頭に管理行動と支援行動を、表側に行行為者と被行為者をとって分けて筆者がまとめたオリジナルである。管理と行為者がクロスするところは管理者で、管理と被行為者との接点は管理される人、会社で言えばすなわち部下である。

管理の場合、表から分かるように、上司はまず会社もしくは自分の計画を知らせて、相手すなわち部下を変えることによって、上司もしくは会社の意図を果たしている。一方、部下のほうは、相手すなわち上司のことを知らされて、自分が変わらされることによって、上司の意図を果たさせられる。

さて、支援のほうはどうだろうか。

支援と行為者の接点は支援をする人、たとえば高齢者の介護であれば、ヘルパーさんである。支援行動と被行為者のクロスするところは支援される人、すなわちお年寄りである。支援者ヘルパーさんは何をしているかというと、お年寄りは日々変化しているし、1日の中でも状態が刻々変わるので、まずヘルパーさんは、相手であるお年寄りのその日その時の状態を知って、自分を変えることによってお年寄りの意図を果たす。一方、被支援者であるお年寄りは、まず自分のことを知ってもらって、相手、すなわちヘルパーさんに変わってもらい、自分の意図が果たされる。

この表で、太字の部分で左右で見比べていただきたい。自分と相手というように、管理と支援では、相手と自分がすべて入れ換わっている。つまり、管理行動と支援行動では、行為者も被行為者

も、180 度対称的になっている。

このように、管理は自分から出発して相手を変える行動様式であり、支援は相手から出発して自己を変える行動様式である。換言すれば、管理は自分から出発して相手をコントロールする行動様式であり、支援は相手から出発して相手との関わりにおいて自分で(自由意思で)自分をコントロールする行動様式だと定義できるだろう。

すなわち、支援は相手中心の行動様式であり、管理は自己中心の行動様式である。

したがって、管理の被行為者は「させられている」のであり、支援の被行為者は「してもらっている」のである。つまり、管理関係は、「させる/させられる」を交換しあっているものであり、支援関係は、「してもらう/してあげる」を交換している。

表 管理と支援の本質的な違い

| 関係者 \ 行動様式 | 管 理                                                    | 支 援                                          |
|------------|--------------------------------------------------------|----------------------------------------------|
| 行 為 者      | 自分のことを知らせて(計画)<br>相手を変えることによって、<br>自分の意図を果たす。          | 相手のことを知って<br>自分を変えることによって、<br>相手の意図を果たす。     |
| 被行為者       | 相手のことを知らされて(計画)<br>自分を変わらせられることによって、<br>相手の意図を果たさせられる。 | 自分のことを知ってもらって<br>相手に変わってもらい、<br>自分の意図が果たされる。 |

本質的な違いとは：管理は自分から出発して相手を変える行動様式  
支援は相手から出発して自分を変える行動様式

(舘岡康雄『利他性の経済学 支援が必然となる時代へ』, 新曜社, 2006 年, pp.84-87 より, 一部改変)

問 1 辞書では、「支援」とは「ささえ助けること」(広辞苑第 6 版)と定義されているが、下線部「いたずらに口出しをしないで見守る」ことがなぜ「支援」になるのか、本文の内容を踏まえて 100 字以上 130 字以内で述べなさい。

問 2 本文で論じられている「管理」と「支援」のメリット・デメリットについて説明した上で、学校場面において、「管理」と「支援」はどのように生徒に必要となるのか、それぞれの具体例となぜ必要になるのかその根拠を 600 字以上 800 字以内で述べなさい。